

本日の前の箇所には、安息日の会堂でイエス様がご自身の権威によって神の国の真理を人々に教え、また悪霊を追い出されたことによって神の国が到来していることを示されたことが記されています。本日の箇所はその後についてのみことば。

I. イエス様の御業

1. 「一行は会堂を出るとすぐに、シモンとアンデレの家に入った。ヤコブとヨハネも一緒であった。シモンの姑が熱を出して横になっていたので、人々はさっそく、彼女のことをイエスに知らせた。イエスはそばに近寄り、手を取って起こされた。すると熱がひいた。彼女は人々をもてなした。」(29-31)
 イエス様は安息日に会堂での礼拝と宣教を終えるとシモンとアンデレの家に行かれた。シモン（ペテロ）の姑（妻の母）が、熱を出して横になっていた。「ひどい熱で苦しんでいた」（ルカ 4:38）とあるように、軽い熱ではなく高熱であった。※証 家族の中に病気の人がいれば親身に看病をするはず。しかしモーセの十戒に「安息日にいかなる仕事もしてはならない」という戒めを厳重に守っていたユダヤ教では、病気の治療行為も仕事であると定め、また自分の妻以外の女性や熱病の人に触れることも禁じていた。そのためシモンの姑は安息日が終わり医師の診療を待っていたはず。ユダヤ教の教えを破り罰を受けることを恐れていたため、他の人は何もしてあげられない。イエス様はシモンの姑のそばに近寄り、手を取って起こされた。するとたちまち熱は引いて元気になり、そして彼女は喜びと感謝でイエス様と弟子達をもてなした。
 イエス様の行動から分かることは、安息日に兄弟姉妹と共に神を礼拝し、苦しむ兄弟姉妹がいるならば寄り添い愛を示すこと。イエス様のこの2つの行動は数ある神の命令の中でも、最も大切なこの2つの命令『あなたは心を尽くし、いのちを尽くし、知性を尽くし、力を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい。』、『あなたの隣人を自分自身のように愛しなさい。』（マルコ 12:30-31）を守り行うことから来ていた。私たちは自分の生活、勉強、仕事ばかりに心を奪われてしまわないように祈ろう。神を愛するために礼拝を大切に、隣人を愛するために時間を捧げて交わりの機会を持つなど。イエス様は私たちが神に造られたこの2つの目的を見失わないようにと教えています。シモンの姑はイエス様に癒して頂きすぐにイエス様と弟子達をもてなした。つまり、イエス様の愛を受けた者はその愛にこたえて神と隣人に愛を持って喜んで仕える者とされます。イエス様が命をかけて現された神の愛を受けた私たちも、神を愛すること、隣人を愛することとは自分にとってどのようなことであるかを祈り、実行していく者でありたい。
2. 「夕方になり日が沈むと、人々は病人や悪霊につかれた人をみな、イエスのもとに連れて来た。こうして町中の人々が戸口に集まって来た。イエスは、様々な病気にかかっている多くの人を癒された。また、多くの悪霊を追い出し、悪霊どもがものを言うのをお許しにならなかった。彼らがイエスのことを知っていたからである。」(32-34)
 カペナウムの人達は安息日が終わったのを見計らいイエス様の所に集まった。イエス様は、多くの病や悪霊につかれた人達を癒すことにより人々に愛を示された。これはイザヤ 61 章 1-2 節の成就。イエス様は癒やしや悪霊を追い出し、イザヤの預言が成就することによって、ご自身がメシアであることを明確に示された。イエス様の生涯をみると、イエス様は人に裏切られ続けた。しかしそれでも私たちに愛を示し続けられたのは、私たちの存在を愛しておられるため。イエス様は弱い私たちであることをご存知の上で愛しておられる。そして何よりも全ての人に共通してある私たちの体をむしばみ恐れを起こさせ最後には死に至る罪を完全にきよめるために、イエス様は私たちの身代わりとなり十字架で死なれた。私たちはそのことによって癒され、解放された。まさに「主はわたしに油を注ぎ、わたしを遣わされた。捕らわれ人には解放を、囚人には釈放を告げ、」（イザヤ 61:1）のみことばの成就。そこに私たちへの究極の愛の御業をイエス様は示された。私たちはいつもその恵みに目を留めさせて頂き、感謝と喜びに溢れさせて頂きながら歩む者となるように祈り求めましょう。イエス様は悪霊に対してご自身が誰であるかについて話すことを禁じられた。それは①悪霊に対するイエス様の権威と御力を証明されるため。②メシアであることをご自身の言動を通して人々に信じてほしいため。③サタンの計画ではなく、ご自身のご計画でメシアとしての正体を明らかにするため。

II. イエス様の御業の源の力

「さて、イエスは朝早く、まだ暗いうちに起きて寂しいところに出かけて行き、そこで祈っておられた。」(35)

この寂しい所とは荒野のことであり人里離れ何も無い所。そこでイエス様は天の父と交わった。イエス様は天の父との交わりをなぜされていたのか？それは①御父と御子イエスは完璧な愛で互いに愛の交わりを持つことを喜ばれたため。②力を与えられ、この荒波の世の中で神の働きを成すため。③父なる神の御思い・御計画を聞き、自分の成すべきことを確認するため。イエス様は常に働かれていたのではなく独り静まって御父と交わりの時を持ち、その中で御心を確認し力を与えられ宣教の働きに行かれた。私たちは日々の忙しさの中で、この世の考えに流され疲れ果ててはいないか？この世の考えは偉業を成し、どれだけ人の役に立てたかなどの社会的貢献度によってその人の価値を決めます。その基準は人と比較することによってはかれます。私たちはこの世の価値基準に支配され不安につきまといわれ生活をしています。しかしイエス様はご自身の語る言葉や業の力は、全て御父から与えられていることを御父との交わりの中で覚え、自ら進んで御父に従う自由を与えられていた。イエス様は、「わたしがあなたがたに言うことばは、自分から話しているものではありません。わたしのうちにおられる父が、ご自分のわざを行っておられるのです。」(ヨハネ 14:10)と告白。イエス様は神であられたのでご自分の力で何でもできたはずでしたが、そうではなく私たちと同じ人間の姿をとることによって、私たちがこの世でどう生きるかを教えてくださいました。イエス様がご自分の力に頼るのではなく父なる神により頼みそこから力を得て全てのことを成されたように、私たちも自分の弱さを認め、自分ではなく私のうちに働かれている神が、事をなしてくださることを信じ委ね、そこから自由を得て神にお仕えしたい。そして「わたしの目には、あなたは高価で尊い。わたしはあなたを愛している。」(イザヤ 43:4)と言われる神は、私たちの頑張りや努力で私たちの価値を判断することは決してなく、私たちの存在を愛し尊んでおられる。主の福音によって救われた私たちは、この世に属する者ではなく、神の価値基準に属しこの世に生きる者とされているのですから、人の目を恐れたり人と比較して自己評価の低さを心配する必要はありません。※証。私たちは、日々の忙しさの中で、独りきりになる大切さを忘れてはいないか？毎日スマホやパソコンは充電しないと使えないように、私たちも日曜日だけではなく、毎日の神との親密な交わり(祈りとみことば)によって充電をさせて頂きましょう。私たちの価値を出来高によって決め、できなければ価値がなく、そして生きる意味のない絶望へと陥れるこの世の価値基準ではなく、私たちのありのままの存在を愛し、私たちの生きる目的を教え、そして事を行わせてくださる力を与えてくださる神に、日々生きる希望と力を頂き歩ませて頂きましょう。

III. 神から愛と力を頂いて福音を伝える

「すると、シモンとその仲間たちがイエスの後を追って来て、彼を見つけ、「皆があなたを捜しています」と言った。イエスは彼らに言われた。「さあ、近くにある別の町や村へ行こう。わたしはそこでも福音を伝えよう。そのために、わたしは出て来たのだから。」こうしてイエスは、ガリラヤ全域にわたって、彼らの会堂で宣べ伝え、悪霊を追い出しておられた。」(36-39)

イエス様が祈っておられると、弟子達が来て人々がイエス様のことを探していると言った。人々は癒しを得るためにイエス様を探していた。弟子達もイエス様が来た本当の理由を理解していなかった。しかし、イエス様は静まりの中でご自身が来た理由を明確にしていた。それは近くにある別の町や村に福音を伝えるため。私たちが生かされている目的はいくつかあるが、今日イエス様が明確に教えていることは福音を伝えるためであるということ。それぞれに遣わされている場所で、救いを知らない人達にその人の永遠の道を左右する最も価値ある福音を伝えたい。

イエス様は、ガリラヤの全域に渡り働かれました。その働きの原動力はどこから来ていたか？それは御父との親密な交わりから大切な奉仕の源の力を得られ、福音を伝えるという働きの目的に確信を与えられ働かれておられた。私たちは何のためにこの地で生かされているかの目的、福音を伝えるために生かされていることを忘れてはいけない。私たちも人生の荒れ狂う世の中にあって目的を見失う。そのような時には神の元に帰り、神の御声を聞くこと。イエス様は天の父の御声を第一にして毎日聞きご自身の使命を確認していたので、迷うことなく福音を伝えることができた。そしてその福音を完成させるために死にまで従われた。私たちも私たちが命がけで愛して下さった神と交わり、御声を毎日聞き、私たち一人ひとりに委ねられている家族、友人、知人に間に合ううちに神から頂く愛を示しつつ、福音を宣べ伝えさせて頂きましょう。